
扇子びーと

一抹始終

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

扇子びーと

【Nコード】

N8855C

【作者名】

一抹始終

【あらすじ】

東京郊外にある私立襲芳舎学園に転校してきた一渚草太と坂本里美。二人は夏休み前に女子生徒が自殺していたという事実を知って調査を開始する。鬼畜上等の手段によって、明るみになる真実。浮かび上がる疑問。そして、新たな犠牲者―正義を知らぬ少年の行き着く先は、崩壊かそれとも発展か？綱渡り必至の学園パズル。無くしたピースは見つからない。どーぞお気に召すまま召し上がれいっ！

キケン（前書き）

所詮小説なんてのは頭ん中のさらけ出し。

ちっぽけな内世界で悪戦苦闘、捻って練って振り回されては、あれよこれよのつじつま合わせ。

不肖、一抹始終。ここはやりたいうにやらせて戴きます。

完全不定期、物語は脳ミソの気まぐれしだい。

終局はここで祈っておきましょう。

それではようこそいられました、僕の世界へ。

小さいですが、お気に召すままだーぞご覧になって戴きましょう。
幕開けです／

キケン

彼女は、教室から溢れんばかりの不毛な“ヒゲコール”には一切反応を見せずに、僕という未知の存在に対しても一欠けらの緊張も見せずに、ただ、ただ当たり前前に、まるで単なる呼吸の延長の如く、なんの変哲も無い有り触れた口調で僕に疑問を、もう何年も前から用意されていたかの如く、ごくごく有り触れた台詞を使って問いかける。

「キミはいつたい誰なのかな？」

それは僕のコア。僕自身でさえ決して許されない、ましてや意も知れぬ他人が土足で踏み入ることなんてあってはならないはずの領域――それは僕の価値それ自体を貫いている

キケン。

それは僕の存在を否定する言葉。
キミの存在を認めない言葉。

けれど、けれど、その時の僕は言葉の意味を、本当の意味では理解してはいなかった。

キケン（後書き）

登場人物／不確定

一渚草太＝転校生その1　―僕
坂本里美＝転校生その2

松平公正＝教師

山崎透子＝クラスメイトA
斎藤誠＝クラスメイトB
近藤由憂理＝クラスメイトC
衣呂土方也＝クラスメイトD
加藤正直＝クラスメイトE
桂木沙苗＝クラスメイトF

芹沢舞妓＝保険の先生

沖田綾芽＝死者

桜木陽明＝探偵
？
＝助手

転校生 1 (前書き)

君の世界になりたい。

なんて、初恋の時は思いもしたけど、いかんせん、大それたことは
そうそう言うもんじゃありません。

《君の小鳥になりたい》

これは人を愛した人の台詞です。

シェイクスピアに聞かれたら、なんていわれるかわかったもんじゃ
ありません。

若気の至りって奴ですか。

回る世界を知らないわけでもないでしょうに、本当に幼かったんで
しょうね。

6年経っても、さほど変わっちゃいませんが、今ならちったあ気の
利いた台詞も言えるかもしれせん。

転校生 1

*0

“友達を選びなさい” たあ言いますが、いやはや理にかなったお言葉です。

命は一つと知ってから、はや十年はたったでしょうか。
もしかするとその時からでしょうかね。

答を迫られるようになったのは。

知らないとは素晴らしい反面愚かです。愚かな反面素晴らしいのでしょうか？

どちらにしろ、僕はもうそちら側には戻れません。

「命は何個あるの？」

僕は聞きました。

「そんなの一つに決まってるじゃねーか？」

お父さんは言いました。

きっとそれがスイッチだったんでしようね。

この歳になって、やっと問題がわかりました。

「どうして僕は生きてるの？」

答は見つかりませんでした。

見つかりません。

見つからないでしょう。

「どうしてキミは生きてるの？」

答はわかりません。

わかりませんでした。

きっとこれからわからないでしょう。

「どうして僕はここにいるの？」

「どうしてキミはここにいるの？」

どうしてここは、ここにあるの？ 頑張りました。努力しました。

わかれとうしました。わかりませんでした。わかった振りをしました。わかったつもりでいました。

「答はあるのでしょうか？」

僕は聞きました。

教えてもらえませんでした。

案外僕はもうわかってているのかもしれない。

「生きていていいのですか？」

答はありませんでした。

「わからなくても、いいのですか？」

答はありませんでした。

「わかりました」

わかりませんでした。

わかりません。

きっとこれからもわからないでしょう。

そうやってボクを否定するのか？

全てを否定するとは言わない。ないけれど――

全てを許容できるほど寛容じゃない。

ボクは認めない。

認めない認めない認めない。

＊1

「座れ―― 座れ座れ座れ。席につけ――！ 喋るな――」

「うわおっ！まっちー？？おヒゲ？はあ？添っちゃったの？別人じゃん？」

「なになにっ？もしやイメチェン？イメチェンですかあ？まっちーイメチェンしちゃいましたかっ？」

「誰ですかー？新人さんですかー？」

「いいから座れー 着席。椅子に座れー」

「ヒゲっ！！ヒゲ、ヒゲ、ヒゲねーじゃん！」

「まっつ、ヒゲは？」

「ヒゲ！」

「ヒゲ無きや、ただのまっつじゃん？」

「ヒゲ？」

「ヒゲ魔神。ヒゲ無し魔神！」

「ヒゲはっ？」

「ヒゲ！」

「ヒゲ」「ヒゲ」「ヒゲ」

「とりあえずヒゲはいいからとにかく座れー ヒゲは忘れろ。ヒゲは忘れろ。静かにせいー」

放置プレイー こうゆう状況のことを、《放置プレイ》そんなふうに呼ぶ人間が以前いた。

どこらへんがプレイなのかは理解に苦しむ比喻だが、シェイクスピアが現役だったらきつと好んで利用していたに違いない。

かくいう僕も、三年A組教室前で放置プレイ。

なんでも松平公平いわく《サプライズは待機》だそうだ。きっと彼は、お誕生日会のプレゼントは最後までとっておくタイプに違いない。転校生の登場を勿体ぶって、何食わぬ顔で日常の一場面を演じてるー 状況はまあそんなところ。

むろんそんな演出僕は求めちゃいない。むしろ迷惑。なんだけど、僕に拒否権は与えられてはいなかった。

一生徒ー しかも新参者の僕なんかが、先生の個人的趣向に異を

唱えるのは、浮石沈木というものだ。

だから、僕は彼の外観からくるまだ数少ない情報と、否応なしにでも聞こえてくる“ヒゲコール”を参考に松平公平という教師の人格形成見極め作業に取り掛かる。“これ”は半ば現実逃避の感が否めないんだけど――僕は未知の食材は、それが何か確実にわかるまで口にしない。どうしようもないくらいに保守的な人間なんだからしょうがない。

さてさて、松平公平。松平と聞いて、僕は会津藩主松平容保を想像してしまうがそれはこの際どうでもいい。ヒゲコールからして、威厳はないと推測。がたいのよさは結構なものだ。きっと学生時代はラグビー部だったに違いない。ピシッと決まったジャージ姿は、どこからどう見ても体育教師。しかしながら、ありがちな熱血漢ではないらしい。面倒見のいい親戚のお兄さんといったところか、月並みには生徒に慕われているようで、少しくらいのお痛なら気にしない。少なくとも軽い蔑称なら無視して流す――

「ねえ、キミ？」

と、ここで後方から僕の思考を邪魔するものが――声をかけられてしまった。

僕が不毛な人間推定に走った原因。

未知の食材。新たな種。白紙の解答。猫の背骨。

すなわち――不確定要素。サンプル不足。というかサンプル無し。
「キミはいつたい誰なのかな？」

坂本里美はそう言った。

「君の名前は何ていうのかな？よかったら教えてくれる？男の子が名乗るのは、礼儀だよ」

「……あれ？さっき先生が――」言っけなかつたっけ？だから僕はこの娘の名前を知ってる訳で同時にこの娘も僕の名前を知ってるはずで――んー、まあいいや、「ええと……、僕は一渚だよ。坂本さん」
“坂本さん”は、軽く首を傾げて、僕を見て、「日本人は名前よ

り苗字のほうが大事なの？」と僕に聞く。まるで覚えの悪い生徒を教師が優しく教えるふうに。そんなこともわからないの？緑の瞳が無言でそう、語ってる。

僕は、「君も日本人だろ？それともやっぱ国籍は違うのかい？」などとは聞かずに、

「えっと……、それはつまり、どういうこと？」そう聞いた。サンブルが無い以上、深くは踏み入らないのが最上だというものだ。

「わたしは名前を聞いたんだよ？君の、な・ま・え！あるでしょ？」

「そりゃあ、ありますが……」

「まあいいや。わたしはサトミ。ふるさとの里に、美しいの美で、里美。里美だよ？」

だよ？って言われましても……、なんだ？これってカルチャーショック？まあ確かに、世界にゃ苗字より名前を重んじる国もあるだろうけど。いったいこの娘はどこの血が混じってるっていうんだ？

「ほら、君は？キミは誰？」

誰？誰って僕は――……決まってるじゃないか「一渚草太。えっと……、ただの草に、太郎の太で“草太”草ただけど？」

「ただの草？雑草や道草の類い？むしろでもむしろでも生えてくる生命力豊かなオオバコ草とかの草？」

何もそこまでは言っていない……にしてもオオバコソウ？そんなマイナーな草知ってるようじゃ、少なくとも帰国子女とかでは無いのかな。日本語も流暢だし、“目と髪”以外は普通の、ごくごく一般的な“日本人らしい女の子”そのものだし。まあ胸が無いのがたまにきず――Aカップか？――だけど。

「あいつら、私のハーブ畑によく侵入してくるのよ。栄養横取り――気付いたらタイムがヨモギ――みたいな」

よくわからん比喻だが、坂本さんは自分で言っただけで納得したようで、「ね？」まるで小学時代からの友人の如く僕の顔を覗き込む。

「……？」同意を求められても困るのだが。……つまりこの娘はガ

ーデニングが趣味だと、つまりそういうことか？

「でも草太かあ……」と坂本さんは頷いた。それほど近いわけではないが、緑の瞳が僕の視界に嫌でも入る。エメラルドグリーン色の瞳を持った女の子……。参ったな。こればかりはサンプルないんだ。どう対応していいかわからんぞ？なんて、そんな僕の悩みはお構いなしに、彼女はニコツつと素敵な笑みを僕の視界に見せ付ける。やばいー 笑うとかなりー

「何だか冴えない名前だけど、わたしは好きかも」

「そ、それはども……どうも」

な　なんだ？　急に何をー　何を言いやがんだこいつはっ！
くそっ！迂闊にも動揺しちまった。

「ま、よろしく、草太」

しかも呼び捨てかよ！

＊2

「はい、おはよう諸君。みんな久しぶりだな元気だったか？えー今日から新学期、休みボケせず切り替えていこう。ん、川嶋おまえ真っ黒じゃないか。ガンになるぞ。加藤はなんだあ？その髪はーいまどきモヒカンなんて流行らんぞ？ん？流行ってるのか？知らん、醜いから全部剃れ。斎藤は制服無くしちまったのか？せめてズボンくらいは履いてこんかバカタレが！んん、まああれだ、みんな元気そうでなによりだ。二学期も宜しく頼むぞ我が生徒達。……ええと、それでだな、実はちよつとしたサプライズがあるんだがー」

ガラガラとドアが開いて舞台は整ったということか。担任、松平公正が僕らを手招き、「中に入って来たまえ」と。

僕は意味無く松平公に頭を下げてから、表情に細心の注意をはら

って教室へと重い足を踏み入れる。第一印象は重要だ。それだけでキャラクター付けの九割りは済んでしまう。だからこそ緊張は隠して、特徴は伏せる。大事なものは焦らず、なめらず、かつなめられないこと。自然。そう、何気ない日常の一場面を演じること。サプライズにしないこと。

……オーケイ、感情はイーブンだ。さあ行こう、一渚草太！

「転校生だ」

見りゃわかると言わんばかりの30人分の熱視線。なるほど、これが転校生というものか。実際やってみるとあまり気持ちのいいものではないな。まあわかつてはいたけどさ。

僕はぐると教室を、なるたけ誰とも目が合わないように見渡す。モヒカンやら私服やら黒い異星人やらより取り見取り。校風は自由なるほど。聞いてたけど、そういうことか。それになるほどなるほど、ちらほらと空席がある。おおかたドロップアウトが多発したとかそんな理由だろう。そうでもなければ、一クラスに“二人”それも同時に、なんてのは普通はありえない。何クラスかに振り分けられるのが通常、自然というものだ。

それにしても嫌な視線だ……僕という人間を、外観だけでとらえず見極めようっていうんだろう。そんなら、おあいにくさま。僕に特徴なんてありゃあしないよ。黒髪、黒目、身長百七十センチの五十五キロ。顔の作りも至って普通。ついでにいうなら頭ん中も運動神経もオール三。どうだい。まさに平均的な男子高校生ど真ん中。まあ普通過ぎるってのが特徴、そんな意見もあるかもしれないけどさ。

でも、嫌だ嫌だ。初対面の見知らぬ集団三十人にこんな品定め受けるなんて……特に一番前のモヒカン。おまえさつきから見すぎなんだよ。僕は断じてまだ何も言っていないぞ。気にさわることなんて一つも――ああ、そうか。遠藤君もきつとこんな気持ちだったんだろうな。すまない、今だから謝るよ遠藤君。あれ、近藤君だったっけ？まあ、どっちでもいいさ。とにかく檻の中のゴリラの気持ち

今ならよくわかる。石なんか投げらんじゃなかったな。

でも、やっぱりー　　というか当たり前というか、注目度は僕より彼女のほうが高いみたいだ。モヒカンや眼鏡の委員長他数名除いて、クラスの視線は彼女に集中してるっていいだろう。

転校生その二、坂本里美。

いや、違うな。僕より彼女のほうが注目度は高い訳だから、この場合は僕がその二になるのだろう。

そりゃあ、そのエメラルドグリーンの瞳は目立つだろうね。それでいて髪は栗色さらさらカールちゃんときたまんだ。やっぱり地毛なんかな？さっき廊下で話した時は比較的感觉良かったふうだけど、なんだ、メンデスの法則？メンデルだっけ？エンドウ豆の遺伝は三対一とかそんな感じの……、名前も日本人だし、日本語もペラペラだったし、クォーターかな？まさかカラーコンタクトってことはないだろう。

「それじゃあ、お約束の自己紹介いつてみようか」と松平公正が言った。

その台詞が一番お約束だと思うけど、まあいいさ。レディファーストー　うん、いい言葉だ。一番好きかも。それじゃあ注目度No.1。緑の瞳のイカした彼女、転校生その一からお先にどーぞいってみよう。なんて、思った矢先「はい、紳士的に一渚君からいってみよう」と松平公正が言った。

「はあ？おまえは越前ノ神かつ？会津藩主松平容保かつ？こういうのは最初のほうが不利なんだよ、ばかやろう！おまえは新撰組いて京都でも守ってろー！」なんて存外な突っ込みできるわけなく、「初めまして、一渚草太です」僕は不服ながらも素直に従うことにする。「よろしくお願いします」我ながらなんの捻りも無い滑り出し……　サッカー選手が試合後のインタビューで“そうですね”連発するくらいわかりやすい。

「……………、……………」

「…………それだけか？もう少し話せるだろう？趣味とか」

うっさいヒゲ無し魔神！んなのわかってんだよ！

「ええと……」

さあて、どうしたものか？紳士的に転校生その一になっちまったが……、注目度は中々じゃないか。落ち着け。落ち着くんた僕。こういう時は焦らず、なめらず、なめられず―― そうだ。あくまでクールに有り触れた言葉を紡ぐんだ。

「ああー……」

駄目だ。言葉を止めると注目度は上昇しちまう。何か言え！何か言うんだ。言っちゃえ！

「……東京から来ました」

「……」 「……」 「……」

沈黙が帰ってきた。

あほかっ！ここも東京じゃねえか！しかもここ多摩地区だけに感じ悪いぞ。どうする？どうする――？ 一渚草太？九月にして下半期最大の正念場。見知らぬ集団三十人が僕の次の言葉に注目してる。僕の一举一動微塵も見逃す気配は無いときたもんだ。冷たい視線に、向かい風。助け船は期待できない。大海原にペットボトル一本で浮かんでる。さあてどうする？次の言葉は？次の言葉は――

「ここも東京だよ。知らないの？」 追い風が吹いた。左斜め後方から―― 何がウケたかくすと笑って、転校生その二、坂本里美。あまりにも当たり前のように言われたから、僕は思わず「知ってます」答えてしまった。真顔で前を向いたまま、笑いもせずに。

それが功をせいしたのか、はたまたぬけた奴だと思われたのか、教室の空気が軽くなった。前列のモヒカン君がはっと笑って、いやはや、これは全体和やかムード。アットホームな受け入れ体制調ったいうわけか。サラダボウルに僕の居場所を見つけたよ。なんてアメリカチックなフリーズでも降ってきそうな変わりようだ。

そして、僕の話す相手も見知らぬ不特定多数から、特定個人に―― 少なくとも名前は知ってる背後のクォーターに変化。

「浅草のほうに済んでいました。都市再開発の煽りで強制退去処分

を受けて、こちらに来ました。済んでた家は二十分で取り壊されて、今は浅草ヒルズになってます」

「……………」 「……………」 「……………ははっ」

なぜかモヒカンにはウケがいい。笑い上戸か？

―と、ここで前列、眼鏡の委員長が手を上げた。なぜに挙手？……これは指名が必要なのか？「はい、それじゃあ1番前の眼鏡君」なんて言える訳ないじゃないか。いや、でも客観的にみたらむしろ言うべきなのか？

「部活動、委員会活動は何かなさっていましたか？」

特に指名は必要ないらしい。にしても、見た目通り真面目な娘みたいだ。もしや本当に委員長か？風紀委員とか、いや生徒会書記なんてのも怪しいぞ。

「帰宅部で、委员会は……何かやってたような気がします。ええと……すいません。何かは忘れしました」

「……………」 「……………」 「……………」 聞いた私がバカだった。眼鏡の彼女は、そんな顔してやたらと下手な愛想笑いをしてくれた。

あ、この娘結構タイプかも。難くて、ちょいときつめの感じが、しかも眼鏡つてのが僕的にはポイント高し。名前なんていうんだろ？「ハイハイハイ」と休む間もなく、後ろのほうから元気な声が飛んできた。ショートカットに茶色い猫っ毛、もじどおり猫みたいな女の子。

「とりあえずあだ名が絶対必要だと思いますっ！」

だから勝手に喋るなら挙手は必要無いって、いやマジで。

「前のガッコでは、あだ名はー、一渚君はなんだったんですかっ？」
文法的小かしいけど、キャラ的によしとしよう。こういうタイプは軽く流してやるのが最善だというものだ。

「普通に一渚君でした」

「ええええー」と予想通りの反応を見せてくれる子猫ちゃん。不服たっぷり机の上に手を置いて、つまんない。そんな顔で、僕を見る。

もちろん、僕だってこんな答えで許されるとは思って無い。この手の質問に対する答えは、3日前から用意されているのだよ。ねえ、委員長？―て、委員長聞いてねえし。本読んでる。なにになに……カパーでわかんねえよ。もしかして、委員長もう僕にはあんま興味無い？

僕は一度クラス全体を見渡してから、茶色い髪の子猫ちゃんへと目を戻す。一秒置いてから、確かめるように真顔で言う。

「ごく親しい友人には一渚様と呼ばれていました」

「え？」

きよとん。とする子猫ちゃん。

「えええ」と言葉に詰まってから回りを見渡した。これまた予想通りの反応。この手のタイプは本当わかりやすい。飼うなら絶対この娘だな。

そして見渡された回りはというと、

「……………」 「……………」 「……ははっ」

モヒカンがまた笑って、他大勢はとりわけ変化無し。若干苦笑も見えるけど、まだまだだ。もう少し、いたって真面目に笑いを誘おう。僕が笑うのはそれからだ。

「略して渚様と言われることもありました」

「……………ですかっ？」

「様です」

「……………」

欠けらも笑いを見せずに、笑いを誘う。そうすると僕は―少し変わった奴。掴み所の無い奴。不思議な奴。概ね大体そんな感じに認識される。ここで大事なのは下手な愛想笑いは見せないこと。すなわち、なめらず、なめられないこと。そうすれば僕の位置付けはある一定の位置に振り分けられる。上でも、下でも、真ん中でもない“あやふや” ―つまり、保留だ。

「……………」

黙ってしまった子猫ちゃん。自分で《あだ名が必要だと思っています

っ!」なんて言っておいて、対象の求めた唯一の呼称が“様”じゃ無理も無い。

「ないね……」

何か後ろから聞こえたけれど、気にしない。僕はここで子猫ちゃんのフォローを試みることにする。半分は———というか八割方は自己保身なんだけど。

「子供の頃、近所に一渚之神という神様を奉った神社があつて……どんな神様かは知らないんですけど……まあ、由来はそんなところですよ」

僕が言うやいなや、ホツとした表情を見せる子猫ちゃん。わかりやすい。

僕は続ける。自己保身の供述を。「だから尊敬や人気で様付けだった訳ではありません。どちらかというと蔑称として———いいえ、全面的に僕をからかうための、悪意みを込めた蔑称でした」真面目に、なんてことはない、日時の一場面として感情込めずに言っていた。

「そりよっ……」子猫ちゃんは一度噛んでから、かろうじて「そお———なんですかつ」相槌をうつて答えてくれた。“そうなんですかの7文字で噛むほうが高等テクだとは思うけど、この際君のことは何でも許そう。例え、絡みにくい奴、ウザイ!なんて僕のことを思っていたとしても許しちゃおう。それだけ———それだけ君は、僕の人格形成に絶大な貢献をしてきている。もう、首輪付けて家に連れて帰っちゃいたいぐらいだよ、子猫ちゃん。ん?———子猫ちゃん? 何だ? とゆうか、君は僕の中で、もう自然子猫ちゃんに決定してしまってるじゃないか。まあ、そうか。実際そうだろうな。“あだ名”なんていうものは本来わざわざ考えたりするものでもないだろう。普通は“思い付く”ものなんだろうな。はたまた、自分と他人の関係を確認するための手段。か。

「ええと……、それじゃあそろそろいいですか?」

なんて、許可は欠けらも求めちゃいけないけど、僕は一応前置きをす

る。それから、「改めてよろしく願います」うやうやしく頭を下げ、すぐに上げる。「ええと、」言って、クラス全体をぐるっと見渡す。キッと睨みつける感じだ。間を置いて注目度を上げる。

「……………」

さあて、舞台は調った。さあ行こうじゃないか？一渚草太。キミの出番だ。待ってました！千両役者。一億円のスマイルを見せてやれっ！

「僕のことは一渚様でお願いします」

ボクは、ニコッとこれ以上ない満面の笑みを、観客席に見せ付けてやった。

転校生 1（後書き）

あなたに会えて、幸せでした。

3／4（前書き）

「剣に負けたのでは無い。歴史に負けたのだ」

彼にはこんな言葉を言って貰いたいものですね。

フレーズ的には最高です。

もし聞けたらシビれます。師匠と呼ばせて戴きます。

明治維新。

歴史の変わり目と申しますか、維新という言葉の意味は、“全ての改革”でございます。

維^{これ}を、一新する。

さてさて、維とはいったい何を指しているのでしょうか？

世界は誰にも止められないということか。はたまた、歴史は止まらないということなのか。

どちらにしろ、リアリストもロマンチストも、いざ選ぶとなれば困難です。

あなたはどっちを選びます？

私は――――

*3

休み時間。

「渚さまー」と、かわいい声で僕の元に寄ってきたのは、子猫ちゃん。「様ですかっ？」

ではなくて、眼鏡の委員長。「は？冗談でしょう？」

でもなくて、アメリカンのクォーター。「ん、なにかな？草太」
でもでもなくてー

「俺は加藤。よろしくね」
モヒカンだった。

「わからないことあったら、俺に聞いてね」

なぜか親切的なモヒカン君。いや、モヒカン改め加藤君。それもそのはず、名前は正直というそうだ。

「ああ、ありがとう。是非そうさせてもらうよ。加藤君」

「まさちー」でいいから、いいから。まさちーって呼んでね。渚さまー

髪型と、顔と声と喋り方がこれほどまでに一致しない人間を、僕は初めて見たと思います。姉さん。

「ま、まさちーかい」復唱すると、“まさちー”は目を輝かせて目茶苦茶嬉しそうな顔をした。

「君が望むなら、そうさせてもらうよ。まさちー君」

嬉しそうな顔をした。濃い顔が正直悍ましい。近いって。いやいや！ウインクとかしなくていいから……

「部活は何するか決めた？」

「いや、まだ決めてないよ」

「だったら演劇部に入ろうよ」

「演劇部？」

この学校では、誰でも、生徒なら例外なく誰であっても、何か部活動に所属しなくてはならない。事前知識としてそのくらいのことは知っていたが、「うん。演劇部」こうもいきなり、具体的に要求されるとは予定外だ。

「演劇部に入ろうよ」

「えっと、」だから顔を近づけないで。頼むから。「えっと、一通り見て、考えてから決めたいんだ。だから保留にしろといってくれるかな」幽霊で許される部がいいんだよ。演劇部なんてありません。運動部の次にごめんだよ。

「よし、わかったよ。それじゃあ入部届けは俺が書いておくからね」

「いや、だから」

「いやあ、役者が足りなくて困ってたんだ。助かるよ」

誰かこのモヒカンに言葉を教えてやってくれ。

「保留にしろといってくれないかな」

「うんうん」

「聞いているのかい？」

「うん」

「だから保留に――一通り見てから決めたいんだ」

「えっ？ なぁに？」

……駄目だ。これは面倒臭いタイプの人間だ。「えっと」こうゆ

う奴にはどう接すればいいんだっけか、一渚草太？

……ああ、そっかそっか。そうだった。

答を思い出したところで、僕は素直に過去のサンプルに従うことにする。「実はね、加藤君……」まずは相手の目を真っ直ぐと見つめる。

「……………」

一瞬間まって、身構える加藤君。僕は決して目を逸らさない。瞬

きも我慢する。

「実は……」

「……………」

「……………」

言っておくが僕にそんな趣味はない。

「……………」

「あ……なに？」

たまらず加藤君のほうから、目を逸らしてくれた。声のトーンを強めて、僕は言う。「僕は、僕は天文学部に入ろうと思ってるんだ」「てんもんがくぶう？」

加藤君は語尾を上げて意外そうに驚いた。反応を確かめてから、僕は適当な言葉を思い付くままに並べ立てる。

「ああ。君はUFOを信じているかい？地球外生命体は？ホワイトホールの存在についてはどう思う？ブラックホールはやっぱり存在しないと考えるのが正しいのかな。そもそも重力と磁場の関係から言えば——いやいや、ホワイトホールの存在は否定したくはないんだ僕はっ！否定すると僕の仮定は崩れてしまう。でもでもブラックホールっていうのは——」

固まった顔をひくつかせる加藤君。こうゆうのを人は苦い顔というのだろう。微かな罪悪感を感じないでもなくはないが、そんなものは無視して僕は続ける。

「NGC2024って知ってるかい？暗黒星雲だよ。2004年にハッブル宇宙望遠鏡が捉えた恒星大爆発！いやあ、あれは凄かった。でもでも、そのすぐ後にNASAが非公式にリークしたデータ、あれはおかしい、おかしい。おかしいよね。ね？」

「……………」

「陰謀だよ陰謀！僕らみたいなアマチュアを宇宙の仕組みから締め出すための陰謀だよっ！アメリカ政府は悪い。汚い！ロズウェルの時だってそうだ。あの時だってあいつらは——」

「わ、わかったわかった。頑張ってくれガリレオガリレイ」

逃げるように去っていく加藤君。

虫避け成功。

基本的に僕は男は嫌いなんだよ。特に濃いー奴は。でも、まあいいさ。あの手のタイプは経験済みだし、マニュアルに沿って柔軟に対応すれば案外扱いやすいっていうもんだ。不確定要素も一つあるけど、そのうちわかんذار。どちらにしろ楽勝だ。敵じゃない。

さてさて、転校生その2はどうしているのかな？と僕はなにやら騒がしい教室後方をチラ見する。脱色とは違う、人形のような栗色の髪がわいわいと囲まれているのが目に見える。老若男女、いやいや老はいねえよ。若男女。言いにくいけど若男女に、坂本里美は取り囲まれて文字通りの質問攻めを受けてる模様。

《祖父はアメリカ人ですが、日本生まれの日本育ちです。両親も日本人です。だから、英語は喋れません。てへっ》だ、そうだ。

“てへっ”てなんだよ！旧世界のアイドルかつ？ドジッ娘か？眼鏡っ娘か？　なんて。なんて、僕は強く思ったんだけど、どうやらああゆうのは使う人間にもよるらしい。そして、坂本里美は許されるタイプの人間だった。

《僕は英語は喋れません。てへっ》
ウェンツ君のように。

さてさて、さーち、それにしても僕の元には未だモヒカン一人のこの待遇。半ば当然っちゃ当然んだけど、ちよいと淋しな。子猫ちゃんでも来てくれないかなー委員長はなんかさっきからずっと本読んでるし、……何読んでんだろ？ーまさかっ！ボーイズラブか！くそうくそうくそおー、あのクールな眼鏡の下にはそんな秘密が……「よっ」と、なぜか完全私服の男子が一人、「浅草だっけ？」声をかけてきた。

男かよっ！思ったけれど、これはなかなか美少年。委員長のボーイズラブに出てきそうなジャーニーズ系のイケメンだ。いうなればW a Tのウェンツじゃないほうのーええーっと名前はなんていった

つけ？色白の王子様みたいな――

「――中」

彼は言った。僕の反応を窺うように。

「――中？」

僕は少しだけ驚いて、疑問系で返した。なぜなら、その呼称には覚えがあったから。

「――中だったよ、俺は」

「――中かい！」

見事に隣の中学だった。浅草の記憶が頭をよぎる。まだまともだったころの、僕の記憶。そうだ。僕はこいつを知っている。

「あぁっと、僕は×××中だったよ」

この偶然に感謝を表すように、僕は僕らしからぬ感情のある声をあげた。すると、口元だけにやっと笑う私服の美少年君。

「川向こうか」

“斎藤誠”は悪戯っぽく、からかうように僕に言った。けれど、少しも嫌な感じはしない。むしろ懐かしく、親しみのある声だった。

「川向こうか」

僕は同じ言葉で返した。中学生が友達をからかうように。昔流行った決まり文句を、喧嘩の前置きの言葉を、今は友好の証として口にした。

「“それ”をよこしな」

「やなこった」

僕がまだ中学生だった頃。浅草近辺では“校章狩り”なんていう今覚えは不毛極まりない遊びが流行ってた。よくいえば子供の遊び。悪くいえば抗争といってしまってもいいような、中学生のプライドをかけたお遊びだった。

「懐かしいな、メラゾーマ。いや、一渚様と呼んだほうがいいのかな？」

「メラゾーマは止めてくれ……」

「また会えて嬉しいよ、メラゾーマ」

「いや、マジで！」

高校三年生の会話にしては随分とイタイレベルの内容だが、斎藤誠と僕の間を説明するにはこれ以上はないキャッチボールだ。

―想像してもらいたい。ポケットに発煙筒を忍ばせた中学生。至近距離で連射式打ち上げ花火を振り回す中学生。自分を含め、何人もの中川ダイブを引き起こした張本人の中学生……

「メラゾーマ」

言われて、僕はぐわあと精神的ダメージをくらう。HPにして150は減っただろう。それで僕が生きてられるかどうかは怪しいが、「燕返しを見せてくれよ」

僕はおぼろげな記憶をたどって、当時の彼の必殺技で反撃を試みる。

しかし、「……………」

『効果は無いようだ。小次郎Aには聞いていない』

どこからか神の声が降ってきた。気がした。

「今でも、触ると火傷するってか？」

容赦が無いのは相変わらずということなのか、斎藤誠は僕のイタすぎる過去を不敵に笑いながらついてくる。両手で“何か”を持つ真似をして見せてから、

「俺に触ると火傷するぜ」

当時の僕の台詞を真似しやがった。

……これは痛恨の一撃だ。クリティカルヒットだ。大ダメージだ。ぐわぁー

『草太は死亡した……』

が、偶然にもリレイズをかけられていたため蘇る。

「いや、本当、悪かった。今だから謝る。僕が全面的に悪かった。悪かった」

無条件で3回も謝る僕。それもそのはず、僕はそれだけの所業を

こいつにやってのけたのだから。とかく、メラゾーマ……今覚えれば痛すぎる通り名だ。痛すぎる。わかる人にはわかると思うが、メラゾーマとはメラ系魔法の最上位種で、魔法使いが使う魔法の中じゃ最強レベルの攻撃魔法だ。スライムなら一発で20回は倒せる。序盤に使えたら勇者はいらない。戦士もいない。武道家も。

斎藤誠は「ははっ」と軽く笑って、「偶然ってあるんだな。いや、でも驚いたよ。いつこっち来たんだ？俺は中学終わりにはもうこっちだったけど」

僕は少しほっとする。友好的だ。なんとか恨まれてはいないようだ。

「僕は八月、つい最近さ」

「そうか」と斎藤誠は相槌をうつ。「八月か……」

「親が家買ってさ。向こうじゃ平屋だったのに……なんだ、損失保証、だっけ？補償金がすごいなのって」

「ん……ああ、そうだな」

斎藤が少し渋い顔をしたのを、僕は見逃さない。一応、話をかえる。

「君はやっぱり、剣道部かなんかかい？君の剣技は凄かったけど。ほら、燕返し！……だっけ？」

「たはっ」斎藤は首を横に振ってから、「本当、懐かしいな。なんであんなに流行ってたんだろうな。さすが中学生だよ」

「結局、あれはどっちが勝ったんだ？問題になってから、なんかうやむやになったけどさ」

「——中だろ」と斎藤。

「いや、×××だ」と僕。

「あれれー、まこちゃんなぎいーと知り合いなんですかっ？」と子猫ちゃん。

何の前フリもなく会話に割り込んできやがった。

「友達なんですかー？」言いながら、斎藤の頭をペシペシと叩く子猫ちゃん。そして、軽くあしらうように、「あー」と素っ気ない斎

藤。どうやら、ここには繋がりがある模様。

「なぎいー」と子猫ちゃんは僕を見て言った。

「わたしは近藤由憂理。よろしくなのだ。なぎいー」

どうやら僕のあだ名は“なぎいー”に決定したらしい。

「まあ、これは気にすんな」と斎藤はデコピン一閃。「ふぎゃあ」

と大袈裟なりアクションをとる子猫ちゃん。いや、子猫ちゃん改め近藤……近藤……なんだっけ？まあいいや、子猫ちゃん。

「そいでお二人の関係は？」

興味心たつぷりに僕と斎藤に聞いてくる子猫ちゃん。なんだか《ワクワク》なんて効果音でも聞こえてきそうな悪戯っぽい顔してる。

「……………」

斎藤が子猫ちゃんを空気で決め込んだので、ここは僕が答えることにする。

「魔法使いと佐々木小次郎。異種格闘技で、昔戦った戦友。いや敵同士だよ。こねっ……近藤さん」

「ほえっ？」と言ってから「んー……」と真面目に考えだしてしまいう子猫ちゃん。少し経ってから、「わかりましたっ！」ポン！と手を叩いて嬉しそうに僕を見た。そして、「二人は恋敵なんですねっ！」これでもかといわんばかりに大きな声でそう言った。

「あほか！」

すかさず斎藤のツツコミ。容赦なくスコーンと子猫ちゃんの頭をどつく。いい音。

「なにするですかっ！」

「うっさいボケ！」

ああ！これはなかなか名コンビだ。素晴らしい。なんて思ったところで、「ちゃっせー」教師が現れた。

休み時間終了。

……龍馬に薩長、西郷はんに勝海舟、徳川慶喜、大政奉還、王政復古の号令。鳥羽・伏見、長岡城に会津若松ときたら五稜郭。アームストロング砲が火を吹いて、やれ明治が始まりましたとさ。めでたしめでたし……

まったく初っ端から明治維新たあやってくれるじゃないの。でもまあ、授業って奴は大概どこも一緒なんだね。

生徒諸君は内職どーぞ、私は何も見てません。

浅草でもこんなだったな。歴史の構図は。

ちいと前に問題になった気がしないでもないが、やはりこんなものでしょ。三年の二学期、こんな多感な時期に歴史なんて、スペック無駄遣いもはなただしいというものだ。まあ、僕は結構好きなんだけど。

桂小五郎――後の木戸孝允。長州藩代表として、薩長同盟に力を尽くす。明治新政府では参議となる。西南戦争のさなか、病死。

大久保利通――薩摩の下級武士の出身。明治新政府では版籍奉還、地租改正など近代化政策に取り組む。西南戦争翌年、暗殺される。

西郷隆盛――倒幕軍を組織し、江戸城無血開城を成し遂げる。明治新政府では参議兼陸軍元帥となるが、外交政策に破れ退く。西南戦争の末、城山にて戦死。

以上、明治維新三傑でした。

僕は教科書ペラペラ、維新の英雄達を斜め読み。

まったく幕末ってのは役者じゃ事欠かない時代だな。龍馬よろしく、大久保利通、桂子五郎、西郷はん。近藤勇に高杉晋作ちよいとマニアにゃ吉田松蔭ときたもんだ。『歴史の転換期には総じて英雄が現れる』なんてのは聞いたことあるけど、やっぱり英雄は坂本龍馬かな？話題性は抜群。日本初の新婚旅行に、薩長同盟の立役者。江戸城無血開城に、悲遇の死。生きてたら総理大臣にでもなってたんだろうなこの人は。暗殺したのは誰なんざんしょ？て僕はスネオのママですか？

榎本武揚― 函館新政府のリーダー、旧幕府海軍副総裁。降伏後は、特命全権公使として外交に力を尽くす。

土方歳三― 元新撰組副長、函館にて戦死。

元新撰組鬼の副長は、なんで函館くんだりまで行って戦わなきゃならなかったんだろうね、司馬先生？生まれは多摩の農民のせがれで、若い頃は薬屋さん。今でいやあごくごく有り触れた一般市民があれよこれよの幕臣、旧幕府軍参謀に大躍進。僕が思うに一番歴史に翻弄されちゃったのはやっぱこのお方だと思っんですよ。“燃えよ剣”じゃあないけれど、戦う理由は一度お会いして聞きたいというもんだ。サイン頼んだら切られそだけど。

「あいたっ！」

切られた？訳じゃないけど頭にコツンと何か当たった。《何事じゃー》と吉宗っぽく僕は振り向く。すると、紙ヒコーキをあわてて拾う後ろの席の女の子。ゴメンと目配せ、その後ろでにやにや笑う男子が一人。なるへそ、あいつが飛ばした飛行機が僕に刺さった。そうゆう訳か。先っちょ折れよ。地味に痛え。

僕は気にせず幕末へと思考を戻す。新撰組隊士達を近藤、土方、沖田と並べて二番隊隊長は誰だっけと― 確か三番隊は斎藤一。二番隊は二番隊は……むう、思い出せん。近藤、土方、沖田ときたら、……ぐああ……誰だっけ？

こういうのは一度悩むと厄介で、頭の中を空白の二番隊隊長が行ったり来たり、名無しのくせに記憶の上座にどでんと居座り、不毛な 50 分が経過する。誰だっけ誰だっけ誰だっけ？

そんなこんなで一限終了。

休み時間。

僕はとりあえず後ろを振り向く。斎藤、斎藤、斎藤一。斎藤は、

つと……

……寝てやがる。二番隊隊長は誰だか聞こうとしたのに、あの野郎。

仕方がないので、僕はぐてつと机に顔をくつつける。ひんやり感

がたまらない。

「　　」なんか聞こえた。気のせいだ。

「一……」いや、どこからか僕を呼ぶ声が聞こえるぞ。

「…渚君？」怯えるような小さな声に、僕は振り向く。

「あのあのあの……」

挙動不審の女の子を発見。後ろの席の娘だ。名前は知らない。黒髪で……んーさしたる特徴無し。ただ、物凄く気弱そう。痴漢に合っても無抵抗で我慢しちゃうタイプ。

「なにかな？」

僕がいたって普通に聞くと、

「ひっ」とたじろぐ気弱ちゃん。僕は何もしてないんだけど。こういう娘なのか？男性恐怖症とか。

気弱ちゃんはなんだか恐る恐る、僕の顔を伺うように見た。目が合った。すぐに逸らされる。そっぽを向かれた。180度。

「えっと……」こういう押しに弱そうな娘はタイプじゃないけど、ひとまず名前でも名前でも聞いておくのが最上だというものだ。僕はそう思って、「君の名前は何ていうのかな？僕は草太。ただの草に、ただの太で草太。草太だよ」クォーターの台詞でもパクって聞こうとしたら、

「一渚君……」気弱ちゃんは怯えるように僕を見て、「あの……これ……」制服胸ポケットから何かを取り出す。なぜか泣きそうな顔でまじまじとそれを見つめてから、おどおどと、そしてプルプルと僕に差し出してきた。

「なに？」と僕は受け取る。椅子に座ったまま、何気なく。

四つに折られたルーブリーフだった。

まさかラブレターか？なんて僕は思考を飛躍させる。けどけど、ハートマークは見当たらない。それどころか折目がズレてて雑な感じ。気弱ちゃんはO型なのかな。

「えっと、これは？」

「……………」

なんか言えよ。

「見ていいのかな？」

気弱ちゃんは困った顔をした。コクリと頷く。

許可が降りたところで、僕は折り畳まれたルーズリーフを開いてく。

ラブレターかなあー だいいいなあー なんてあほな思考の中、ペラッと開く。

『私を抱いてください』

「……………は？」

吹っ飛んだことが書いてあった。

「……………」

僕は啞然する。

意味がわからない。

「えっと……………」

意味がわからない。僕は聞く。

「これはなに？」

すると彼女は「ああああ」と今にも泣きだしそうな顔を、「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」連発。「うわあああ」泣き出した。

「いや、ちょ、な……………」

「ああああ……………」

目の前で女の子に泣かれた経験は2回ある。2回とも不可抗力だった。今みたいに。けれど、けれどけれど、それはあくまで予想の範囲内の涙。こんなイレギュラーな涙の経験は、僕には無い。

「…………ど、どうしたん？」

そのくらいしか僕には言えない。

「ああああ……………」

僕は何もできずにあたりを見渡す。眼鏡の委員長と目があった。

0.2秒で逸らされた。子猫ちゃんと目があつた。ビクツと固まつてから、苦笑い。教室から逃げ出した。

なんだなんだなんなんだあ？

クラスみんなはなぜか意図的に“気付かないふり”をしているようで、たいていの輩は僕をチラ見しながら、ごくごくありふれた休み時間のお喋りを継続してる。

「ああああ……」

両手を目に置いて、必死に涙を拭う女の子。か細い声が僕の胸にグサリと刺さる。自己嫌悪……けれど、けれど、どう考えても意味不明。不可抗力。百歩譲って、千歩譲って、僕に非があるとは思えない……

さて、どうしたもんだ？一渚草太？

こういう時、男は黙って抱いてやりあいなのか？どうせ初体験はまだなんだろう。いい機会じゃないか？タイプじゃないが、貰えるもんは貰っとけ。損は無い。相手が求める以上、キミは押し倒しても許される。ここじゃないだし、とりあえず保健室にでもお誘いするか？

……んなあほな。僕はようやく状況を理解する。

妄想癖の僕でも、この娘が不二子ちゃんとは到底思えない。不可解なクラスの反応。そして、“あいつ”。

これは“イジメ”だ。

さっきから教室後方でにやにや笑ってやがる男子。授業中、僕を狙撃しやがった奴だ。あと、男が二人に女が一人。この比率はルパン……いや、今はいい。とにかく、この娘は望んで僕にセックスアピールをしたんじゃない。無理矢理にこんなことをやらされた……

やってくれるじゃねえか。

僕を“だし”に使うたあ、いい度胸だ。これはイジメ兼“サグリ”だ。

オーケー。不確定は消えた。

感情はイーブンだ。もう、僕は対応できる。

「えっと、君は？」

僕はいいながらポケットをまさぐる。ハンカチ、いや、ハンカチ替わりに愛用してるトーションを取り出す。そして手渡す。

「……………」

反応が無いので無理矢理持たせる。僕は基本、女の子には優しいんだ……いやマジで。

「困ったなー いったい全体どーしちゃったんだい？」

適当に言って、クラスの反応を確かめる。

あからさまにこっちを見る者はいないが、注目度が上昇したのが空気でわかる。みんな僕がどう対応するか気になるんだろう？

虐められっ娘の救世主となるか。

はたまた、

知らぬふりを、決め込むか。

僕は――――

「ねえ、新撰組の二番隊隊長って誰だっけ？」
ニコツと笑顔で、そう聞いた。

3、4（後書き）

どうも役者にはなれそうにありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8855c/>

扇子びーと

2010年10月28日04時40分発行